蕉陰句選　完

特別
へ5
6142

むかし丹後のくにゝ大なる璧をもてる者あり
ろくまうの偽さもちて訪うをとのくして
ゆきえんて新しく其玉を百両て
かんといふ翁ありものかうのくてたてまつると
光ますさそあひなるとこのあらはあやしとおも
ひて百両にはえうまそてうらすまさておもに
月のさまくらの紅はるかとつきをつくる璘陽
られ出ぬ者まもあき波しとしやまとひて

[seal]
へ5
6142
58-2168

いよ〳〵さく〳〵とさらひこさを大て
武かまゐくらるなかめちゝよゝ少とふし
人も今ハさらに稿の行ハしさる〳〵なくなる
とさふれや大魯が門流莎陰遺稿
といふものを出さんとして序を予にもとむ
予も日き稿ハ出さるゝもあらまほしきゝく
よわ他者入きかしあるもの遺稿出て
罷て生前の名誉を減するもの多く
なるらず大魯ハとく〳〵摂播維陽の

一大家と称して我門の嚢錐なりし
ふれその佳句秀作ハ人おの〳〵膾炙す
たれか遺稿の出るを期せんやもし遺
稿を出して世の玉なる翁が徴ること
あれ門流背（キカ）をひそかに草稿をあつめ
てかさ字を訂して校合をしめ彫刻せバよ
りけるさうてみさい序をも予におもひこて
おいてやひかうらを取てその草稿を閲
まも予嘆て日まろ稿出さきしきも稿出て

くはしくその完璧をしるべし
先大島氏が為ほ乃栄中よりその教を
かゝる人ゝ足らん門流微笑して去さの
さとし文序とせるべし

安永己亥孟冬　蓼翁識

芦陰句選

春之部

初空や月のなごりもきえて海

福寿草咲や後の玉緒の鶴

　四十九の春をむかふ

むらさきのきぬふのむかし明乃春

人妻の差くり御忌の詣

　高倉帝陵にて

宿直誰鶯よしめも留主の谷

うくひすの声引く枝や竹の中

糸柳しかまえるの杖かな

崖ちかく出る柳の那

岡本 維羅

峡妻や摩耶から夕海を見に

雨の梅赤川の小配る篁かな

黄鳥や楳の香をまり窓乃人

ちぢれ羅よ赤坂ゆく泉のゆかる

洛北呉服町に卜居中に書

さくらしぬけしぞや 雪の呉服町

野諺

赤ら素は梅しや芝居しやうの札人

古草に陽炎を妙山路の車

物外に人のゝ春の旦縫筆

仲雪

赤川のきぬ人の公濃わしき事

雁帰る夕や小田若き蝶

雉啼や多き人の紀関をちる

双親の日に出て行く彼岸哉

まゐのなごり茶を古き起請[illegible]

梅外

田の畦足ぬらしゆくの水行帰

畔ぞやほの見えて通る雉の野

うしろより雨の追来る燕かな

帰雁

雲井にも帰るや田の小田の丁

筆架によりて帰る日和かな

耕すや世を稼ぐ人の行縁まで

もえ出し草も春の小草かな

いとゆふや寺の田に遊ぶ

埋れ井の水あたゝかやまよひかな

涅槃會

尼達の古き涙や釈迦の像

春の友の鼓に寺の香の窓

[illegible]

吉野や桜うつりのしるし哉

難波津の春也五日やう〳〵庭浦
ふりたて角前しる男鹿に
正月始遊ぶ人見侘ぬらむ

三月九日兵庫七宮の
祭礼所く幟押立
神輿御幸の御旅
所も見へ申し

糸桜神輿よかへる祭哉
さくも又峰にはしん花の色
桜さくやよき家建し　梓巫女

海士帆に押まで雪の夕べ哉
これ凡中や沖中盗は船ゑふ哉
足袋脱て小石振ふや菫草
鼻盛に拂ふく春の詠ゐの哉
静けさに庭掃は夕哉
人来れ幸は知侍し
花香の拂くも雪は夢れ華
ゆふ流の春に駈篠郎也し
山陰や小葉は花咲ぬ春也好

ゆく春や旅にかすれたる河ごし
松の月これさく春の名残哉

閏三月の望

もどく春に行まはる日数かな

春書京に寄して

簡のうしろ春おもひし夜はあれ

うら山し帰る雁連て

うらゝに蝶ゐて生ひまはを投舞

夏之部

ほとゝぎす二羽啼雷降の白秋葉
遠ざかりし山伏は里知し寺

懐旧

牡丹折し父の思ひをむかしうに記
簾して廁うらきしみをんにあれ
一とふちて私の好事しける
わたり人も中にそ芥子の花咲ぬ
雨も常しのる家よ春もきのふぐ

雨露ひの廿日も中く牡丹哉

木猿ともふ弄頃す夕あらし

西行庵にて

人去りし後の竹の葉哉

浩榜の花ふれしれ若葉ふ雨

絶えし家ふ折る袷哉

酔葉んて筆濱ぬ古画哉

筆やひとまる射に風鋪守

そしつ空れ花あ里やいせまんア

謝友人

すのしきむとき花もと松鄭

能の蓋ころ秘や宣ま味の多心

病中として旅の三四忌と帛ふ

人の為ふ秘しらる紙ふ友書これ

夏のそや小療影ふ作俗とち

志しめ学の大文ふ成しと寄年ふ

皐て待付宗やけきあら由

美草やや更もり持る馬の数

乙母正當詞書略

首節の今朝ことし羽ぬけ鳥

念佛しも病の窓さす蜂の車

とゝし維　一周諱

雨さらし家一とせを經さつまの那

友草や花有とおもおれし

重五

されをて飛蠟燭ありかひとの

風下の黄蘗寺や麦ほこ李

幮をぬけおるゝ霜の那

坊中うして師の坊とまる　蝸居斗

感懐ノ句

淀連津子序求て五年の
今日首尾しけるに内こもれると
乃将りて申ありしこまる日
友とちかりト来

濁江の氣さく螢見五月雨

久しく百生へる少女膝行

申にふと思ひし氐の漬　加久ん

庭の竹を切りて節より寸
竹の子を押して出たれも旅のなくらし
妻児の飄逸たらん涯
我よ汝か羅や妻子を散の縁ふ
いかり我出む
夜明らやよりてろし皐月空
行路茫く然り
夏艸や滴りしも今も蛇蝮ぬ
舎てかねる仏へ人をさしれて

麦の粉を東ふいつらく風やり哉
是ありていつ地ふならんて
我行間ふ家苔
萍よ寄らくわかれん鳥渋す
右
縦波を生む日一本亭の
賢良驛ふ乞送られる
寒すらくしく家ふ見るれて
うれしき
はられよ母きつき於叢林業
たまくふ小遣顔を引日我秋乃かし

夜川や棹さし乍ら人ゝの声
さゝれ水や三線うちならし流し
河柳や井手堤りの園のもる
子乞女やとりかしこ夜抱きつゝして
舟出の足ゝしも問ゝ田植かな

京に遊びて

見かへる鉾下りきり四人の親
そのふれ旅人あやしく納涼かな
多賀や沿とこの泝古きたれ

兵庫に移りて

海をみて淡路須磨の景色うつる
午睡あとにもむくむ菜よう経に浴
うらに小童まとまれ甜瓜かな
旅人の銭なくしまれ清水かな
悪僧の下に宗浴しける清く茶
うらなるゝ月のかゝるまゝ
西明や出見世まれ御談の人
世界に医師や枯たす日なた

秋之部

きのふ川秋やゝ露の珠数の音

義朝の茌縁も如くり池乃蓮

浦邊初穐

浜もしく昼寺ありし姥々朝乃露

秋風やわのゝふ男が秋の日和

病がらし室と思ふ初秋

夜日比社洗ひんくらふ深秋

星合の名所なりしも川

難のも描しかをよほし一夜

引合や詩作る姉ちつもんのまん

秋暑

少名也の新たけし結わつきら

涼しさや秋の日角れ人通り

うつれし女の馬髪集せ散花火

きれるのて燗も黒奴未權發

とんがしやあまれをれくさいうて

蜻蛉や施餓鬼の飯乃茄子の先
僧正の樸実はなやむ風
踊子や夕闇多して狂ふしき
兵庫なる敷して
活魚のうさ遊ぶ浮の風
七人もし巻の説や哭角力
六ツ子多き先ふ人り
すてき人秋の夢見れる
稲妻の白いひく窓の美人哉

茶つみや湖より出る須戸の闇
きのふに果桃よりうつし手
鮎の膳於毎へも任寺
老杜親おし秋風を人乃園し泣
眼の浪も即由く風の底の郷
陽親おそく行母待まし　西風哉
正名世代古俳りし　賀
田も畔もとし行ふ秋を讓る禁
旅人よ何く花の茅まくん社

女九　鳩ゝ鬼燈なきに
よその米はなれ豊の秋

秋興八句

家杜紅塵陌
夜を相撲登る踊の啼さへ
草生ふる小園なり
露後に夕河のなかれくふさ　便
出戸澱河流
秋の海くさ世の人ゝ遠さの海

一夜くひやる歌かな
蕣咲く蛍もつまじく遊子が旅をわすれ
夜坐妻子をおもふ
ゝ秋のもみぢのさきくれ
老杜ゝ樹ゐて嫩に
よもの秋に家秋のしき旅の陣
一身盲山雲
ぬうつらゝ飄ゝ秋の新編の札
国を辞して九年の春

都とふく一と世乃秋
わ遠ゝ見えし故にかけ峰の音

田家良夜

茨かしの牧屋をかしくりかなき
名月や茅舎拂ふ摩耶おろし
風ふきて身にしむ夜も門茶哉
衣擣如旅まゝの月を西
追風や秋すりゆく月の走る
中秋取当翁子戸をし氣

鹿澤をゆくふ鞍馬の月清し
鈴虫に二声もし杉に鳴子哉
山畠や茄子並ちれ稀の風
ゆるんよ秋の中ゆきもし哉
賑りや釜飛ふ屋のあきな哉

草庵小集

端居して主ゝ侘ぬ月見哉
野風や大名連し月見かな
小原女や都ふ一夜の秋子連

宗匠は妻射行しか新しけれ
為孫芋広滑戸の半秋
船毎に蒼麦飯に月の出しけれ
十三夜二句
若ミや鬼薬く盛の室の此来
入中あふ秋に長月の光ん乃中
目覚し旅僧生し居る秋哉
西風に日和かゝる夜寒かな
禁湖のつゝ中もり哉

病寝の　重陽より
ちかをも見舞の形見す菊の御講を
くある筆作んと思ひ
まりての聖日より菊
つくミ申
此の北し菊作り節こともし蕾
新米の菊に見まりをかしの人
暮秋や手の上から石抜き
うけ寂く堅まりまりもみち哉

雨の鴨一羽となりて暮にけり

家好が大工の誂る松かさかな

惜秋

起出て身を寒ん秋の果

有明残月

残月や一軒の松の末の間より

冬之部

葛かつる染みやもみち時雨

袖付ても宮様をぬらし父案

慈悲が佛室へて初時雨

窓中

山陰や冬の風来る、ふれて大音

ともしびや火の粉のみ燃えてけり

閨怨

夢や寒さ衾縫て居尽す

洛東金福寺の芭蕉庵落成して

探題

山畑や麦蒔人の小さゝし

梢ちるよ露掃おろす誰が為

霜に欺す蟬蛻を掘りけり

おさ無や因し道来る霧の市

病中京師の客舎にて

祖翁の祥忌を勤て

十月や翁はとしばふ札仏

梵論の笠吹とし枯楚に虫

冬夜

としとしに古き筆を焦し色

世の人の家数には成ぬ寒さ哉

風や障子がたきめのつくるきぬ

楠公碑

唖々と啼烏が声も寒さかな

この内外や千菜子暗き窓の楼

我をのミしたふ友の冬田哉

ゑらくと庵の跡をくれ千ゝろし
う女りくおもに進まし河菜めす

深草元政上人のあと
月空に竹と年ふれあらしかな
みな川尽きぬ雪の流しけり
山風や霧ふきこめし馬の耳
紫畠やたくつらふ霧乃折ゝ葱

船中
ゆく雨へ歩みにぬらし寒くれ

花山のきぬかきし野ゑに年
埋火に深山の嵐乃いまもりは
明さすくとし母のきせ乃蒲苞ら

梅きさかりなる

京師に旅寝して
初空しやたなれ雲しや都の春
みちて小田雲ゝにうつ作手
分ゝての道足に心きの分
歳まり縁庵あり冬こもり

語不驚人死不休

横たはる墨も拭ずや筆の里

年内立書

おしみなき春をまづ得けり筮の味

嫁娘や里の行ふき節月秋

かのみな人々皆なし身の家

我を然む人をすてし此野

ある人大魯なる京師にありし時
夜半翁の門に入て後浪速に移り
蕉陰舎をむすびける兵庫に至て
三遷居をひらくそのかくし山陽道と
いへるものはなれしのいふ立すらく実に
知音の友なりしの去年の秋病にふして
身は浪華旅寓をまちまちにけふも
あすのも知らずあるは金福禅寺なる
芭蕉庵のかたはらに葬しむれと

なをいせ影あよそてはしのやな
美しも俳諧なし周と縁との深さし
然るやしされ侍る翁多起卧乃習あるえ
拙紙なし志言のはも聊かさるの
秋世させの家路ふはしき志え杭の葉
しつそこひかの山のほとりにて亡骸をおさめ
侍りぬるて月日のうつりゆけば
跡あるなきとひれるきいひあはせる句を追
おもひ起こして八唯現なし句を綴る

やうやう巻して歌ノみハ年みなも経まさてし
かれまさに侍るはいふやむ属かし
やおて草稿を侍り合せて世の集
夕集と題し門下旧識の人々
と志をおなしうしともに残
まつ置きしまいらせ侍る

安永八巳亥仲秋望日

九菫書

安永八己亥年霜月

浪速書肆　石原茂兵衛梓